



## 【神に喜ばれる生き方(真実の愛:あわれみ)】

今日の聖書本文:マタイの福音書12章1-8節(新改訳2017版)/暗唱聖句:ペテロの手紙第一2章10節

チヨンナムチヨル

説教者:鄭南哲牧師

(Rev.Jung nam-chul)

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！先週一週間もみんなお変わりないでしょうか。みんなお元気でしたか。緊急事態宣言の最後の一週間となりました。緊急事態宣言8月27日(金)から始まり、本来9月12日までだったことが、さらに延長となり、今月30日まで、一か月以上の長かった期間が、いよいよ、今週木曜日(30日)で解除される見通しです。来週からはいつものように、1部8時半・2部10時共同礼拝が行われ、全て通常通り行いますので、どうぞ宜しくお願い致します。(牧場もそれぞれご都合に合わせて再開・アワナ毎週11時半・水曜夜祈り会午後7時半・学び会も来週日曜日から再開)

神は人を用いて下さる時に必ず、その人の内側を主の器として整えるために、訓練させて用いて下さいます。内側の人を整ってないのに、教会などで働こうとする事で様々な問題や混乱を招いてしまう場合がしばしばある事をみなさんもよくご存知でしょう。自分の内側の変化は一人だけの变化で留まりません。みなさんの家族、主の教会、みなさんの周りの人々による影響を与えると信じます。人はトラブルに巻き込まれたり、問題が生じる時、その原因を環境のせいにしてたり、外部のせいにしてたり、回りから捜そうとする傾向に早い者ですが、実は我々の問題は厳密な意味で自分のうちにある場合が多くあります。キリストを受け入れ信じる者たちの祝福の一つは、内側の人とどまらず、続けて成長し、成熟されて行く者なのです。なぜならば、救い主キリストの姿としてますます変わって行きますから。徐々に、益々我々もイエスキリストのように心遣い、考え方、生き方、価値観、自己中心から他人中心に内側がますます変わって行く事を主ご自身が喜ばれ望んでおられるので、そうなるように聖霊の神は今も我らを助け、導いて下さっています。

今週から始まる新たな10月に愛するクリスチャンプレイズの全神の家族が共に益々主にあって内側の人を守られ、強くなり、さらに成熟され、世の光と塩として、神の栄光をあらわす愛の通路と管として、用いられますように神の祝福を切にお祈り致します！

## &lt;今日の本文の内容&gt;

今日の御言葉の本文1節に、イエスキリストの弟子たちが「空腹だったの(ひもじくなったの)」、安息日にある畑の麦の穂(ほう)を摘んで食べ始めると、その姿を見つけたパリサイ人たちがイエス様に訴える場面が出ています。私はこの箇所を読むたびに、まず、イエスキリストに特別に選ばれ、いつもイエス様のそばにいた弟子たちだったのにも関わらず、「空腹だったの(ひもじくなったの)」、麦畑で生で穂を積んで食べる姿!の箇所がいつも心に残り、響いて来ます。

当時、イエス様の弟子たちだったから、収入が多くなったり、必要さが豊かに満たされて恵まれた生活をされたよりも、かえって頻繁に空腹な生活をされていたことが分かります。

イエス様時代3食すら、食べれず空腹でひもじい生活をしていた弟子たちらや、激しい迫害によって生活が落ち着かず、無我夢中(むがむちゆう)で身を避け、隠れた生活をする時もあった初代のクリスチャンたちの生活を覚えると、今日我々はどれほど信仰の自由の中、ある程度ゆとりのある暮らしをしているのか思われます。私は今日の御言葉の本文の中“弟子たちが空腹だった(ひもじくなった)”ところに心がひっかかります。

ところが、その箇所の意味をもうちょっと深く考え裏返せば、イエス様の弟子たちが空腹でひもじい生活をしたというのは、そもそも、イエス様ご自身から、地上での生活と生涯はそのような生活を送っていたからではないでしょうか。

実はただ弟子たちだけではなく、神の御子であられる主イエスキリストご自身がまず、この地上で、たびたび空腹な生活をされたから、弟子たちも従って同じように空腹な生活をしたと言うことになるでしょう。イエス様は、確かにこの世に来られ、物質の裕福(ゆうふく)な生活や、人の人気、この世の権力にたよる道に選ばれず、ただひたすらそれより、もっと大切に価値ある神の使命と来られた目的、つまり、人類の尊い魂の救いとその救いの御業を全うするために、地上での生涯をまっすぐに歩まれたお方ではありませんか。

## ①イエスキリストご自身もひもじい生活だった?

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！だからこそ、我らは絶えずイエスキリストの生涯の生き方、なされた行いと御教えにより注意深く注目し学びつつ黙想して見る必要があるのではないのでしょうか。

今週10月が始まると、もう今年のクリスマスまで、約残り後3か月となりましたが、イエス様のご誕生についてちょっと考えて見ましょう。神の御子、人類を救うために地上に来られたイエスキリストがこの世にお生まれになったところは派手やかな宮殿とか、貴族の家ではなく、病院とか普通の家でもなく、馬小屋の中、動物のめしびつ、飼葉桶のわらくずの上でお生まれになったではありませんか。今日みなさんの中でいくら貧しくて古くて狭いところでご自身が生まれたとしても、馬小屋で生まれた方いらっしゃいますか。

イエス様の生活はどうでしたか。ルカの福音書21章37節には、「こうしてイエスは、昼は宮で教え、夜はいつも外に出てオリブという山で過ごされた。」と書かれています。どういう意味なんですか。

イエス様と弟子たちは夜眠れる決まっているところすらなかったという意味です。「いつも！外に出て」と書いてあります。オリブ山で寒い夜、外で、暗い山の中で頻りに眠れたイエス様の姿をみなさん、実際想像して見て下さい。とても衝撃的ではありません。イエス様と弟子たちはこの世の中では野宿者だったということです。**マタイの福音書8章20節に「イエスは彼に言われた。「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕するところもありません。(或いはルカの福音書9:58節)」**とおっしゃったのはただ文学的な表現ではありません。神様がこの世の来られたのにもかかわらず、家賃さえ払えるお金がなくて、山で野宿(のじゆく)されたことなんて！

我らの中で寝れるところがない方はだれもいませんね。しかし、イエス様は夜になると、いつも外に出てエルサレム城の外にあるオリブ山まで上り、そこで眠れる生活をされたことにみなさんはどう思うでしょうか。

**神の御子であるイエスキリストなのに、十字架につけられ死なれました。**普通若者なら、十字架の上では少なくとも三日間ぐらいは苦しくて叫びながら結局死んでしまうのですが、イエスキリストはあんまりにも体が弱かったため、十字架にかかってから6時間で死なれました！それともある記録によると、十字架の上でのイエス様の姿は裸のままでした。我らとすべての人々のための罪を赦すため、代わりに罪の代価すべてを支払うために十字架につけられたのにもかかわらず、その人々はむしろ、人々はイエス様を受け入れず、イエス様が神に罰せられ、神に打たれ、苦しめられているのだと、イエス様をあざけったり、ののしったり、侮辱をかけたのではありませんか。(旧約聖書イザヤ書53章4節—12節)

我々は先週一週間、生活において、欲求不満、不平不満をもらしたり、大変、足りない、不便、狭いなどと言いながら、つぶやいたことはありませんか。この世に来られた神の御子、救い主イエスキリストが過ごされた生涯をいつも覚えると、イエスキリストの御前で我々の生活でぶちぶち言うのは減って来るかも知れません。このようにイエスキリストのこの地上での始まりから、生涯、そして、最後の十字架の時をいつも覚えるたびに、我々は今自分に置かれている人生、生活に心から神に感謝することができるのではないのでしょうか。ですから、人と自分を比べないで、いつもイエスキリストご自身を見上げ、比べると、一生感謝を忘れないと信じます！

先週我らが属している日本同盟基督教団は宣教130周年を迎えられました。日本同盟基督教団の歴史は、**スカンディナヴィアン・アライアンス・ミッションの15名の宣教師が横浜に上陸した1891年11月22日に始まり**ました！男性6人、女性9人は、伝道のために献身し訓練を受けた信徒たちで、按手を受けていたのは2人だけでした。ミッション創立者のフレデリック・フランソン(神の救いの福音を宣べ伝える宣教師になるか、そう出来なければそのような宣教師たちの為に祈り支援する者になりましょう！と訴え続けた人物)は、スウェーデンに生まれ、アメリカでドワイト・ムーディーの推挙で伝道者となり、ジョージ・ミューラー、ハドソン・テラーの影響を受けた世界的伝道者でした。切迫するキリスト・イエスの再臨ゆえの急務の伝道をフェイス・ミッションで開始、中国に35人を派遣、その次が日本でした。これで15人が遣わされ、横浜に上陸されましたが、日本宣教の道は決して容易くありませんでした。来日後3ヶ月、19歳のメリー・エングストロムが天然痘(てんねんとう)で召天、残り14人も大変な迫害や経済的必要、霊的戦いの祈りの日々だったとスウェーデン語のミッション機関紙『シカゴ・ブラデッド』にその記録が掲載されたそうです。日本で大変な生活をしながらも、特に私は残りの14人の宣教師たちに多くの感銘を受けたのは、彼らは大都市や便利な地域ではなく、当時まだ日本中でキリストの福音が全然届いてなかった未伝道地を目指し(房総半島(ふさ:関東地方の南東にある半島)、濃尾(のうび)地震の被災地(1891.10.28美濃・尾張地震マグニチュード8.0過去日本の内陸で発生した最大級の地震)、飛騨の高山・古川、伊豆(いず)・伊豆諸島(しよとう:静岡東端(とうたん)部)など)そこでの福音伝道の働きをなされたということでした。**その尊い犠牲と献身の結果、130年たった今日、日本同盟基督教団は、全国261教会と教職者435人と教会員約1万3千人、子ども約千人という実が豊かに結ばれることになりました。**

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！今我らに必要なことや求め願うことがまだたくさんあるかも知れません。しかし、地上で空腹でひもじい生活をされながらも、もっと価値ある一人の尊い魂の救いと神の愛を分かち合うために歩まれたイエスキリストの生涯を見習い、今与えられていることにもっと感謝を忘れず、神に捧げ、分かち合う今週一週間、新しい10月と今年、そして、一生感謝する生涯となりますように祈ります！

そして、各牧場で、教会の中で、キリストの福音を神の愛を分かち合い、奉仕をする時に、不便なことや足りないことや時には自身に犠牲が伴われる時もあるかも知れませんが、イエスキリストがその時を忍ばれ、神の救いの御業を十字架の上で完成させたように、我らも忍びつつ、続けば必ず実が結ばれると信じ期待しつつ、共に仕えて行きたいと願っております。

## ②神様がもっと大切に望んでおられることを見逃してしまったパリサイ人たち

今日パリサイ人たちはイエス様の弟子たちが安息日に穂をつんで食べたことに**2節に、イエス様に“ごらんない！あなたの弟子たちが、安息日にやってはならないことをしていますよ！”**とそしりました。するとイエス様はこのパリサイ人たちに旧約聖書の中の**ホセア書6章6節**の御言葉を引用されました。今日の本文**7節**を見ると、「**わたしが喜びとするのは真実の愛。いけにえではない(この箇所は新改訳3版の訳がもっと正しい)私は哀れみは好むが、いけにえは好まない**」とおっしゃいました。

そして、むしろ彼らをしかります。

**みなさん！なぜイエス様はこんな状況で「あわれみ」を言われたのでしょうか。**パリサイ人たち(分離された者たちと意味ユダヤ教の指導者集団、旧約聖書とその意外にも信仰と生活の一つの標準として流伝(りゅうでん)(613個があつた:昔の人から

の言い伝え、マルコの福音書7:3)を信じ守っていた者たち)はイエス様の弟子たちが安息日(ユダヤ人たちは神様が安息されたこと神に礼拝を捧げる日として定めた日:出エジプト記20:8-11)に麦の穂をつんで食べたことについて責めています。

しかし、イエス様はパリサイ人たちがこの出来事について、むしろイエス様は彼らを叱責します。それは、「なぜ、安息日に穂をつんで食べたのか。」ではなく、空腹になっているあなたの隣人にあわれみを持って、「どれだけひもじくなって穂を食べなければならなかったのか。しかも安息日に。」という心はないのか。パリサイ人たちは安息日に自分たちこそ、パリサイ派でしっかりした信仰の教育をされたリーダーたちとして、決められていた律法と流伝(りゅうでん)をしっかり守って来ていたので、一番正しい生き方をしていると思い込んで、他のすべての人々に自分たちのように従うべきだと信じ込んでいました。そのため、安息日に穂をつんで食べる事も自分たちが決めていた律法に反することを犯してしまったと思い込んでいたわけです。しかし、彼らの本当の生き方と本音をイエス様は見抜いておられ、ご存知でした。パリサイ人たちが安息日に神の律法を大切に守っていたからより、彼らはお腹が満腹で、おなかですいてないため、今日の前に現れたひもじくなっていった人々の必要さにまったく関心がないことを。本当にパリサイ人たちは弟子たちが安息日に畑で穂をつんで食べるのがよくないと思い、二度もそのように犯してほしくなかったならば、イエス様の弟子たちを責めるより、空腹の彼らに食べ物あげて、ひもじくならないように助けるべきだった、それが、神の律法の核心である、心を尽くし、命を尽くし、知性を尽くして神を愛すると同じように、隣人の自身のように愛することを本当に守り従うことだったのに、彼らは、だれより神に熱心に仕え、愛していますと言いながら、勝手に隣人への神の命令はほったらかしていたことをイエス様が知っておられました！

そのような二重的、偽善的だったパリサイ人たちだったのに、当時、人々の前では、まるで、自分たちが一番神様の為が一番正しい者たちであり、熱心を持った者であり、他の人たちが自分たちを尊敬し見習うべき一番模範的な存在だと思い込んでいました。イエス様の当時、パリサイ人たちの姿は、自分たちがいつの間にかに作り上げた人々の前での自分たちの画面とイメージが信仰そのものであると思って込んでいた人たちだったことが分かります。

彼らは神様に喜ばれ、一番望んでおられるあわれみと愛の心と行いには見逃して、いつも儀式や人に見せる奉仕だけに執着していたわけです。そんなパリサイ人たちにとってはいつも他の人をよく批判し、さげすみ、攻めるばかりだったのは当たり前だったかも知れません。ですから、イエス様はパリサイ人たちに神様はそうしながらのいけにえを好まず、あわれみを好むとおっしゃったのです。つまり、パリサイ人たち、彼らの本当の姿、内側の面をすべて見抜いておられたイエスキリストは自分勝手な基準で、神の律法を持って人をさばく者ではなく、神の愛と哀れみを持って分かち合い、隣人への必要さにあわれみと関心を持って愛の手を差し伸べられる者になってほしい！とおっしゃった意味ではないでしょうか。

愛するクリスチャンプレイズ教会の家族のみなさん！この御言葉に照らされ、私たち自分自身の姿も振り返って見てほしいです。私たちは安息日に穂をつんで食べている弟子たちにむかって「どうして安息日に穂を摘んで食べたのか」という方なのか、それとも、「どれだけひもじくなって安息日させ、あんな生の穂までつんで食べているのか、さあ、何かすぐ食べ物を持って来てあげますから」とされる方ですか。言葉だけあれこれ偉く言う方ですか、それとも実際自分の周りの人々に温かい関心と愛を持って、その人々の必要さに自分にあるもので助けて上げる方ですか。

ここで私たちは神様の御心を知ることが出来ます！神様は安息日をきちんと守る者になること、つまり、今日だったら、日曜日、主の日の礼拝をしっかり守ることは大切ですが、その前にもっと大切なこと！優先すべきことがあるとおっしゃいます。それは日々、神のあわれみを受けた者たちが、人をあわれむ心と行いキリスト者になることを望んでおられることでした。それはただパリサイ人だけではなく、今ともに立て聞いている我らにも望んでおられたことです。

例え、イエス様は弟子マタイを最初主の弟子として呼ぶ時に人々に何とおっしゃったのですか。

マタイの福音書9章13節です。「わたしは喜びとするのは真実の愛(あわれみ)。いけにえではない。」とはどういう意味か、行って学びなさい。わたしが来たのは、正しい人を招くためではなく、罪人を招くためです。」と。今日我々にもイエスキリストは主の弟子として我々にもそのように語り、望んでおられると信じます。主は今日我々にもこの御言葉を与えて下さっています。今日の本文の内容の後、マタイの福音書12章11-12節を見て見ましょう。「11:イエスは彼らに言われた。「あなたがたのうちのだれかが羊を一匹持っていて、もしその羊が安息日に穴に落ちたら、それをつかんで引き上げてやらないでしょうか。12:人間は羊よりはるかに価値があります。それなら、安息日に良いことをするのは律法にかなっています。」

<③「あわれみ」とは?>:相手の立場に立ち、深く愛する、深く同情心を持つ、深い慈悲心を持つことであります。

それではみなさん、今日の本文の中、一番大切な核心的な単語である、この「あわれみ」についてともに考えて見ましょう。「あわれみ」とは何でしょうか。この「あわれみ」という単語は、もともと人の品性に使われた単語ではなく、神様の品性、つまり神様のあわれみを表現した時、使われた単語であります。まず、旧約聖書で神様のあわれみに該当する体系的な単語がヘブル語で「ラカミム(rachamim)」と言います。特に、「ラカミム(rachamim)」という言葉の意味は、「ヤフェ(神)の子宮」として解釈しか出来ません。つまり、あわれみは妊産婦(にんさんぶ)母親が体内の子宮の中にいる赤ちゃんの尊い命に向かう切ない心と深い愛意味であります。これがあわれみ深い神の御心であります。人に対する神のあわれみは、あまりにも深く、高く、強く、広く、強烈な愛であったため、「ラカミム」という表現しかできなかったのです。父なる神様は今も私たちが神を愛するより、先に我らを愛され、はるかな大いなる愛とあわれみを持っておられるお方であることを示して下さいます。

そして、新約聖書でのギリシャ語では「エレエモン(ereemon)」という単語で、その意味を直訳すると「相手の中、皮膚の中に入り、その立場を立つ事」を意味します。この言葉は「その人の表だけではなく、その人の考え、その人の状況、共感する」を意味します。つまり「相手と自分を同じくする」という意味であります。

そして他にもイエス様のあわれみを語った時は、「スプラングニゾウマイ(splangchnizomai)」というギリシャ語も使われましたが、これも「スプラングナ(splangchna)」という名詞の意味は「体の内臓」です。つまり、この単語をまとめてみると、「内臓、心臓がやぶれるほどの痛みと心を持って理解する、共感する」という意味であります。神様のあわれみというのは神の内臓のように、神の一番深いところからわいてくる神の最高の愛の表し、一番神の強烈な愛の姿が神の憐れみであるという意味です。

ですから、「神のあわれみ」は母親が子を自分の内臓、つまり命のように思われる父なる神の深い愛の心であることがわかります。(イザヤ49:15-「女が自分の乳飲み子を忘れるだろうかによろか。自分の胎の子をあわれまないだろうか。」)だと言えるでしょう。

愛するみなさん、罪人であり、軟弱な我々に対する父なる神様の心を一言で表すと、哀れみ深い父なる神様と言えるでしょうか。あわれみとは苦しみの中にいる人を愛で包もうとする心であり、軟弱な人、助けが必要な人をかわいそうに思われる父の心です。

「痛んだ葦(あし)を折ることもなく、くすぶる燈心(とうしん)を消すこともなく、真実をもってさばきを執り行う。(イザヤ42:3)」イエス様はいたんだ葦のような人間をかわいそうに思われ、彼らのいたみをとみにされるためにみずからいたんだ葦のようになられました。そして、くすぶる燈心のような人間をかわいそうに思われ、みずからくすぶる燈心のようになられました。

そして、あわれみは苦しみの中にある人と苦しみをともにしようとする心です。私は個人的にクリスチャンとして一生慕い求めている品性の一つもこのあわれみです。父なる神様が罪人である我々の心といたみを知ってかわいそうに思われる心があわれみであるように、私たちもほかの人々との関係において相手の気持ち、心と共感する力、そしてその人の苦しみにいたみに一緒に参加する心があわれみであることが分かります。

神は父なる神様のあわれみの心を我々が持つようにと願われておられます。神様はいけにえよりあわれみをもっと好まれると今日の聖書の本文は言っています(マタイ9:13)。なぜでしょうか。今日の暗唱聖句であるマタイの福音書5章7節の箇所からその答えを探してみると、イエス様はほかの人をあわれむ人になるとき自分も同じくあわれみを受けるからだとこたえてくださっています。マタイの福音書5章7節「あわれみ深い者は幸いです。その人たちはあわれみを受けるから。」ヤコブの手書2章13節では「あわれみを示したことの無い者に対しては、あわれみのないさばきが下されます。あわれみがさばきに対して勝ち誇るのです。」

ほかの人をあわれむ時、我々の心は和らげられ愛の実を結ぶことができます。ですから、あわれみを施すことはほかの人のためである以前、我々自分のためであることを忘れないでください。あわれみはほかの人の心と共感する力です。相手の話に全部同意する必要はありませんが、相手の立場でいくらでも共感することはできます。あわれみは相手の苦しみに参加することです。あわれみの心があれば、私たちを苦しめている人たちが受ける痛みまでも理解することができます。フランシスは自分の同僚にあわれみについてこのように教えたそうです。「もし、我々を苦しめている人がいるなら、その人がほかの人を苦しめるために抱いているその心を見てその人をかわいそうに思いなさい。」つまり、ほかの人を苦しめるために注いでいるエネルギー、その荒らされている心の悲劇をみながら、むしろその人をあわれんであげなさいとのことです。

<3. 適用:すると我々はどうするば自分もあわれみの人になれるでしょうか。>

<①人を哀れむために、まず、日々神様のあわれみを受けなければなりません。>

「あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けたことがなかったのに、今はあわれみを受けています。(第一ペテロの手紙2:10)」

哀歌3章22節「【主】の恵みを。実に、私たちは滅び失せなかった。主のあわれみは尽きないからだ。」

聖書はまず、ほかの人にあわれみを施す者になる前に、我々自身がまず神様のあわれみを受けるべきであることを教えています。なぜでしょうか。人は自己中心的な者なので、自分と関係ないことに基本関心がありません。たまに困った人が見えたら、助けようとする人々はいても、自分が犠牲を払いながら、苦しみがらだれかに哀れむ心を持って助けようとする人々はさらにできない無理な話ではないでしょうか。

聖書では神様のあわれみが与えられる時、我々は神様の赦しを受けることができますからです。ダビデは姦通の罪と殺人の罪を犯したとき神様のあわれみによって赦されたと告白しました(詩篇103:4)。我々が救われたのもあわれみに豊かな神様の愛によったのです(エペソ2:3-5)。神様のあわれまれる心が我々になくは真にほかの人のためのとりなしも、愛の奉仕も、伝道も正しく行うことができません。あわれみは父なる神様の恵みです。あわれみを受けることは我々の努力である以前、神様の恵みであり、神様の愛から出ることを忘れてはいけません。

「神はモーセに言われました。「わたしはあわれもうと思う者をあわれみ、いつくしもうと思う者いつくしむ。」」ですから、これは

人間の願いや努力によるのではなく、あわれんでくださる神によるのです。(ローマ人への手紙9章15-16節)」

ですから、まず神様のあわれみを受ける者になることがさきです。ほかの人へのあわれみはそれからです。これこそが祝福です。神様のあわれみが我々に臨まれた時、我々は、閉ざされた心の扉が開かれ、新しい回復といやしを受けます。そして、その力と恵みと愛によって我々もほかの人をあわれむ父なる神の心を抱くことができるのです。そういうわけで、神様のあわ

3

れみを受けるために我々は日々神様の御前にでなければなりません。ですから、みなさん、家の教会である牧場に参加、祈り会、礼拝に参加し、臨在しておられる神の恵みと哀れみをいただきますよう。

「ですから、私たちは、あわれみを受け、また恵みをいただいて、折にかなった助けを受ける ために、大胆に恵みの御座に近づこうではありませんか。(ヘブル人への手紙4章16節)」

### ＜②神のあわれみを施すためには忍耐と赦しを持って具体的な実践する＞

神様のあわれみは耐え忍ぶあわれみです。使徒パウロは耐え忍ばれている神様のあわれみを経験されました。イエス様を信じる前、彼が教会の迫害し、主の愛されている執事ステパノを石打ちして殺す時さえも神様は待っておられました。彼が主に戻られるまで、彼が悔い改めるまで待っておられたのです。ついに、神様はパウロをあわれまれ、耐え忍んだすえ彼を救われたのです。

「キリスト・イエスは、罪人を救うためにこの世にいられた。」ということばは、まことであり、そのまま受け入れるに値するものです。私はその罪人のかしらです。しかし、そのような私があわれみを受けたのは、イエス・キリストが今後彼を信じて永遠のいのちを得ようとしている人々の見本にしようと、まず私に対してこの上ない寛容(耐え忍び)を示してくださったからです。

(第一テモテ1:15-16)」

1996年に召された霊性学者であり、イエール大学とハーバード大学の教授、そして障害者たちと一緒に生活していたヘンリ・ナウエンはあわれみの道こそが忍耐の道である事を強調しました。“あわれみの道は忍耐の道である。忍耐はあわれみの訓練である。”あわれみを意味する‘compassion’という単語を‘com-patience’とも読めるという事実からこれはもっと確実になる。‘passion’と‘patience’という単語はラテン語の‘パティ(pati)’から派生したもので、この意味は苦難という意味であります。あわれみの人生というのはほかの人々とともに忍耐しながら生きることである。そういうわけであわれみの道について聞かれたらそれこそ忍耐がそのこたえである”と言いました。

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰のみなさん！信仰は抽象的な概念ではなく、具体的な行動や実践であります。イエスキリストを受け入れ信じて神の子どもとなられた人たちは必ず関わる人々の中でイエスキリストの姿が現われて行きます。ですから、我々のやることはイエスキリストがそうなさったように互いにあわれみ合うことです。互いに赦しあうことです。

「互いに親切にし、心の優しい人となり、神がキリストにおいてあなたがたを赦してくださったように、互いに赦し合いなさい。(エペソ4:32)」そして互いに忍びあうことです。「ですから、あなたがたは神に 選ばれた者、聖なる者、愛されている者として、深い慈愛の心、親切、柔和、寛容を身に着けなさい。(コロサイ人への手紙3:12)」

愛するクリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族のみなさん！残りの9月と新しい10月が始まります。来週から教会での礼拝とアワナの集まりまで再開することになりますが、共に神にあわれみを受けるために、共に神様に近づこうではありませんか。まず、イエスキリストとの関係が大切です。神の御前で神の哀れみを常に受け、イエスキリストはいけにえより、あわれみを好まれるという御言葉を忘れず、関わる全ての人々にいつもあわれみの豊かな者になりましょう。人にあわれむ者は神のあわれみを受けます！あわれむ心と行いこそ、人を回復させ、愛を造り出し、回復させます！夫婦の中で、家族の中で、牧場の中で、職場の中で、学校の中で、教会の中で残されている今年3か月全ての人々に神から頂いた哀れみを忍耐持って実践し続けていくうちに、ますます神に喜ばれる全クリスチャンプレイズチャーチの信仰の家族ととなりますように主イエスキリストの御名によって祝福します。アーメン！



日本同盟基督教団  
クリスチャンプレイズチャーチ

Christian Praise Church